

39 最晩年の西行法師と『小夜の中山』歌、その考察

付．中世の古東海道、中山峠道の考察

筆 者 山崎 卓司

1 はじめに

掛川市の東部に位置する小夜の中山は、古来歌枕として有名である。小夜の中山の歌の中でも人口に膾炙したものに、西行法師の歌がある。

「東^{あずま}の方へ相識りたりける人の許へまかりけるに、小夜の中山見しことの昔になりける思ひ出でられて」と詞書があり、 註①

年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山

(西行法師歌集 113)

と歌っている。西行は26歳の時と、69歳と生涯2度の東下をしているので、二度目の中山越えを、感慨深く歌い上げたものであることがわかる。

註① 西行全歌集 久保田淳 校注 P406 岩波文庫

本論は西行の歌をはじめとした、数々の歌を生み出した中世東海道の小夜の中山の道筋と、西行の歴史的な役割を、前出の歌を足掛かりに考察することを目的としている。

2 中世東海道の道筋

西行がたどった中世の東海道は、江戸時代の旧東海道とは異なり、険しい道で、それなればこそ「命なりけり」との詠嘆も生まれたのであろう。小夜の中山の登り口の情景が鎌倉期の紀行文に残されているので、まずそれを見ていきたい。

一つ目は鎌倉初期の紀行文『海道記』である。京から鎌倉への途次、作者は、ことまま神社に詣でている。

「思ふことのままに叶へよ杉立てる神のちかひのしるしをも見ん

社のうしろの小河を渡れば、小夜の中山にかかる。この山口を暫くのぼれば、左も深き谷、右も深き谷、一峯に長き道は堤の上に似たり。両谷の梢を目の下に見て、群鳥の囀りを足の下に聞く。谷の両片はまた山高し。この間を過ぐれば中山とは見えたり。」 註②

社のすぐ裏を小川が流れているが、そこを渡って、山口に取り付くというのである。叙述から察すると、今のことのままトンネルの上(城戸山)を登り行くルートらしい。川を渡るために、古くは渡河して対岸に取り付いて登ったものと見える。実際、近郷の方に聞くと「此の山を越えて、小夜の中山まで行きました。」という言葉も聞いた。この作者は中山峠を越えて、菊川の宿に泊まることとなる。

二つ目は『海道記』と同時代の紀行文『東関紀行』である。やはり、ことのまま神社を詣でて歌を詠んでいる。

「ことのままと聞こゆる社おはします。その御前をすぐとて、いささか思ひ続けられし。 ゆ

うふだすきかけてぞたのむ今思ふことのまなる神のしるしを小夜の中山は、古今集の歌に『よこほりふせる』とよまれたれば、名高き名所なりとは聞きおきたれども、見るにいいいよ心細し。北は深山にて、……」註③

註② 海道記 岩波文庫 P25 岩波書店

註③ 東関紀行 日本古典全書 P180 朝日新聞社

東関紀行の作者も、社を過ぎてから小夜の中山に取り付いたものだろう。東海道の難所の一つに数えられた中山峠は、かなりの陰しさと見える。この作者も菊川の宿に泊まっている。女性の紀行文もある。

「廿四日、昼になりて、さやの中山こゆ。ことのまとかやいふ社のほど、もみぢいとさかりにおもしろし。山かげにて、あらしもおよばぬなめり。深くいるままに、をちこちの峰つづき、こと山に似ず、心ぼそくあはれなり。」 註④

鎌倉目指す阿仏尼も小河を渡り、小夜の中山の山口に取り付いたらしい。さすがに女性の旅に、心細さは隠せないようである。菊川の宿に泊まった阿仏尼は、雲かかるさやの中山こえぬとは都に告げよ有明の月と、恋しい京へ思いを馳せている。

註④ 十六夜日記 日本古典全書 P274~275 朝日新聞社

この小夜の中山への登り口について、内藤亀文氏は次のように述べている。

「(旅人は) 本宮山から突き出たあの堤防状の出っ張りについて右に曲がり、その突っ先を回って背後の小河を渡ったと想像される。小川を渡るとすぐ谷の口で、細道が谷の奥の方に伸びている。(中略) この近辺の人々は、この細道をとって小夜の中山へ出たという。」

註⑤

先を急ぐ徒歩の旅では、回り道を避け、できるだけ直進する道筋を選んでいく傾向がある。同書の小夜の中山行程図(別添資料1及び2)を見ると、日坂を回るのでなく、陰しくても直進の尾根道を選んだものであろう。

註⑤ 『遠駿 峠の古道』 P95 内藤亀文 明文堂

陰しい山中峠越え故に、人は越し方、行く末を思いやることになる。西行の歌にも、彼の人生観が色濃く投影されているのを感じるのである。さて次に西行法師の歌に込められた思想と成立事情に迫ってみよう。

3 西行法師の旅の目的

西行はなぜ老躯をおして、苦難の旅をしなければならなかったのか。73年の生涯の最晩年に、小夜の中山を越すほどの大変な旅を……である。

西行の二度目の東下の旅は、文治2(1186)年、西行が69歳の時である。その前年は平家が壇ノ浦で滅んだ年である。源平の争乱の中で、平重衡によって南都は焼き討ちされ、東大

寺は大仏もろとも焼け落ちてしまった。全国の国分寺の総本山が灰燼に帰したのであるから、仏教による鎮護国家の礎がなくなり、国家存亡に関わる一大事である。深く憂慮した、時の後白河法皇は、俊乗房重源に総責任者の役務を担わせ、東大寺の再建を企図する。しかし、それは非常な困難を伴う大事業だった。

第一に、大仏鑄造のための黄金の工面が問題であった。^{めっき}鍍金のための金であるが、当時、陸奥国を支配していた藤原秀衡に節を屈して懇願する方法はある……。しかし、誰がその掌に当たることができるのか？

第二に、物流の拠点である鎌倉を通過する黄金。その物資は差し押さえをうけることなく、畿内まで輸送させたい。鎌倉幕府との折衝に誰が当たることができるのか？

この難題を解決するために重源が白羽の矢を立てたのは、他ならぬ西行法師だったのである。当時、伊勢に隠棲していた西行を重源は何度か訪れて懇願したらしい。西行は奥州藤原氏と同族の佐藤氏出身だった。

「西行法師は1118（元永元）年に誕生し、1190（建久元）年2月16日に没している。俗名は佐藤義清。^{のりきよ}藤原秀郷（倭藤太）9代の末裔で、武門として名流の血を受け継いでいる。」
註⑥

「徳大寺家での待賢門院珠子（徳大寺実能の妹）との縁から鳥羽院に仕え、さらには門院の子・崇徳院にも近侍したと考えられている。」 註⑦

註⑥ 岩波小辞典 日本文学—古典— P80 岩波書店

注⑦ 和歌文学辞典 P241~242 桜風社

西行と奥州藤原氏とが親戚関係にあることは、当時広く知られていたことである。また、西行が鳥羽院の北面の武士としても活躍したことも知られている。

「西行はとくに騎馬・弓射の精華である『^{やぶさめ}流鏑馬』に熟達していた。」 註⑧

このことは源頼朝との面談の伏線にもなっている。

註⑧ 西行 （人物叢書） P39 目崎徳衛 吉川弘文館

西行が小夜の中山に至ったとき、西の方の都に思いを馳せ、東の方の艱難を伴う使命を思ったのに違いない。さらにこれまでの人生を振り返るよすがともなったであろう。

「命なりけり」という詠嘆には、一筋ではない西行の思いが含まれている。さらにさらに、朝野をあげての大仏の再建という難題も、その肩に負っているのである。

1186（文治2年）初秋7月に伊勢を出立した西行は、小夜の中山を経て、8月の半ばには鎌倉に辿り着いた。この時の様子を『吾妻鑑』が伝えている。

「15日 巳丑 二品（源頼朝）鶴岡宮に御参詣。而るに老僧一人鳥居の辺に徘徊す。之を怪しみ（梶原）景時を以て名字を問はしめ給うのところ、佐藤兵衛尉義清法師なり。今は西行と号す云々。仍って奉幣以後、心静かに謁見を遂げ、和歌のこと談ずべきの由仰せ遣はさる。西行承るの由を申さしめ、宮寺を廻りて法施を奉る。二品彼の人を召さんがため、早速に還御、則ち當中に招引して御芳談に及ぶ。此間、歌並びに弓馬のことに就きて、條々

尋ね仰せらるること有り。」 註⑨

8月15日は旧盆にあたり、西行は頼朝公の参詣を承知の上で徘徊したに違いない。弓馬のこととは、流鏑馬のことである。

「鎌倉武士は実戦の雄ではあるが、この伝統行事を誤りなくこなす素養を身につけてはいない。頼朝は流鏑馬のみならずあらゆる部門に都の文化を導入しようとしていたから、西行の体得している秀郷流の故実は垂涎の的であった。」 註⑩

西行は頼朝公の希求を百も承知で、鎌倉を訪問しているのであろう。翌年の放生会から、頼朝公は流鏑馬を始めている。この際の芳談を幾人かの御家人が同席していたらしい。

50年ほど後、嘉禎3年7月19日の吾妻鑑の記事にそのことが出ている。5代目執権・北条時頼が初めて流鏑馬の練習をした時に、助言をしていた海野幸氏が「西行のアドバイスは、かくかくしかじか」と述べ、以後幕府の正式な作法となったことが見えている。

註⑨ 吾妻鑑(2) P71 岩波文庫

註⑩ 西行 人物叢書 P143 目崎徳衛 吉川弘文館

西行は伝家の武芸を惜しみなく披瀝する代わりに、本来の目的、つまり東大寺再建の勧進を頼朝公に伝えたに違いない。ここにも重源と西行の深い読みがあったようである。また東大寺の再建に関して、頼朝公は強い関心を寄せていたことがうかがえる。周防国で重源上人が東大寺再建の用材を伐採していることに言及して、「結縁に心あらん人ハ、可令合力なと被仰下て、畿内・畿国・西国方ハ、細々ニ勧進の御沙汰可候に候、関東方ハ、頼朝勧進御使として可相励候也、」 註⑪

と、頼朝公自身が関東地方の勧進を進める旨を呼び掛けている。

註⑪ 鎌倉遺文 第129号 1巻 P133 東京堂出版

頼朝公は東大寺の再建を通して、仏との結縁を図りたいと願っている。神仏に対して敬虔な態度を持した方と見える。穿った考えかたをすると、平氏が起こした災厄を源氏が収めたとすると、世論の趨勢が源氏に傾くと考えてのことかもしれない。とにかく、頼朝公が東大寺の再興に前向きであったことは、否めないことであった。西行の勧進が功を奏したのかは明確でないが、芳談の中で東大寺の勧進に触れられたことは考えられることである。さらに奥州・藤原氏への勧進も当然、話題となったであろう。

「(幕府と秀衡は)一貫して冷戦状態にあった。平家を滅ぼした頼朝は秀衡に対して、そなたは『奥六郡の主』われは『東海道の惣官』だから『貢馬・貢金等はまず鎌倉に沙汰して進めなさい。自分が京都に伝進するから。』と申し入れ、…」 註⑫

文治2年5月24日の吾妻鑑にも記載されているように、双方の地位協定が定められているので、鎌倉幕府の貢金の輸送に対する承諾は、必須のものだった。

註⑫ 西行 人物叢書 P147~148 目崎徳衛 吉川弘文館

幕府受入れは、約定として頼朝公と西行が了解したとみられる。西行にとって、この約定の

締結がこの旅の最も重要かつ困難なポイントと考えていた。ある意味、命がけの使命ともいえるであろう。その痛切な思いが「命なりけり」に結実していると考えられる。

翌日、再三の引き留めにも関わらず、西行は陸奥に旅立ったと吾妻鑑は記している。頼朝公から拝領した銀製の猫は、門前に遊んでいた子どもに惜しげもなくくれてしまったとも記している。西行の最後の仕事は、奥州平泉にある。

「小夜の中山」の歌の詞書にある「東の方へ相識りたりける人」というのは、前述の通り、同族の藤原秀衡のことである。これから向かうのは、見ず知らずの人間ではない。鎌倉の頼朝公よりは、ずいぶん気の置けない相手であろう。この交渉も無事終えたことは、吾妻鑑の文治2年10月1日の、次の記事からも十分にうかがえる。

「1日、甲戌、陸奥国今年の貢金4百50両、秀衡入道之を送献す。二品（頼朝公）傳進せしめ給ふ可きの故なり。」 註⑬

註⑬ 吾妻鑑（2） P77 岩波文庫

西行は、老躯を鼓舞して帰京後に、京都の嵯峨に暮らしたようである。

うなぬ子がすさみに鳴らす麦笛の声におどろく夏の昼臥し昔かな炒粉かけとかせしこと
よ 相あこめの袖に玉たま櫛くしして竹馬を杖にもけふは頼むかな童遊びを思ひ出でつつ 註⑭

これらの歌には小夜の中山の歌に見られる緊迫感はなく、ゆったりと老境を楽しむかのように、幼いころを回想しているのがわかる。

註⑬ 西行全歌集 聞書集 P282 岩波文庫

4 結び

西行は『山家集』で

願はくば花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃 (77番)

と詠じたように、1190（建久元）年2月16日、弘川寺に入滅したという。波乱に富み、また日本の危機に身をもって対峙した西行の、見事な、しかも優美な最期である。西行への憧憬は文芸の世界に流れ続ける。頼阿然り、宗祇、芭蕉へと続き、西行への憧憬は、現代にも連綿と流れ続ける。

西行への憧憬は、文芸のみではない。『富士見西行』というモチーフがある。富士を見ながら歌想を練る西行の後ろ姿を思い描いたものである。これは「自賛歌」でもある

風になびく富士のけぶりの空に消えて行方も知らぬ我が思ひ哉

(西行法師家集 85)

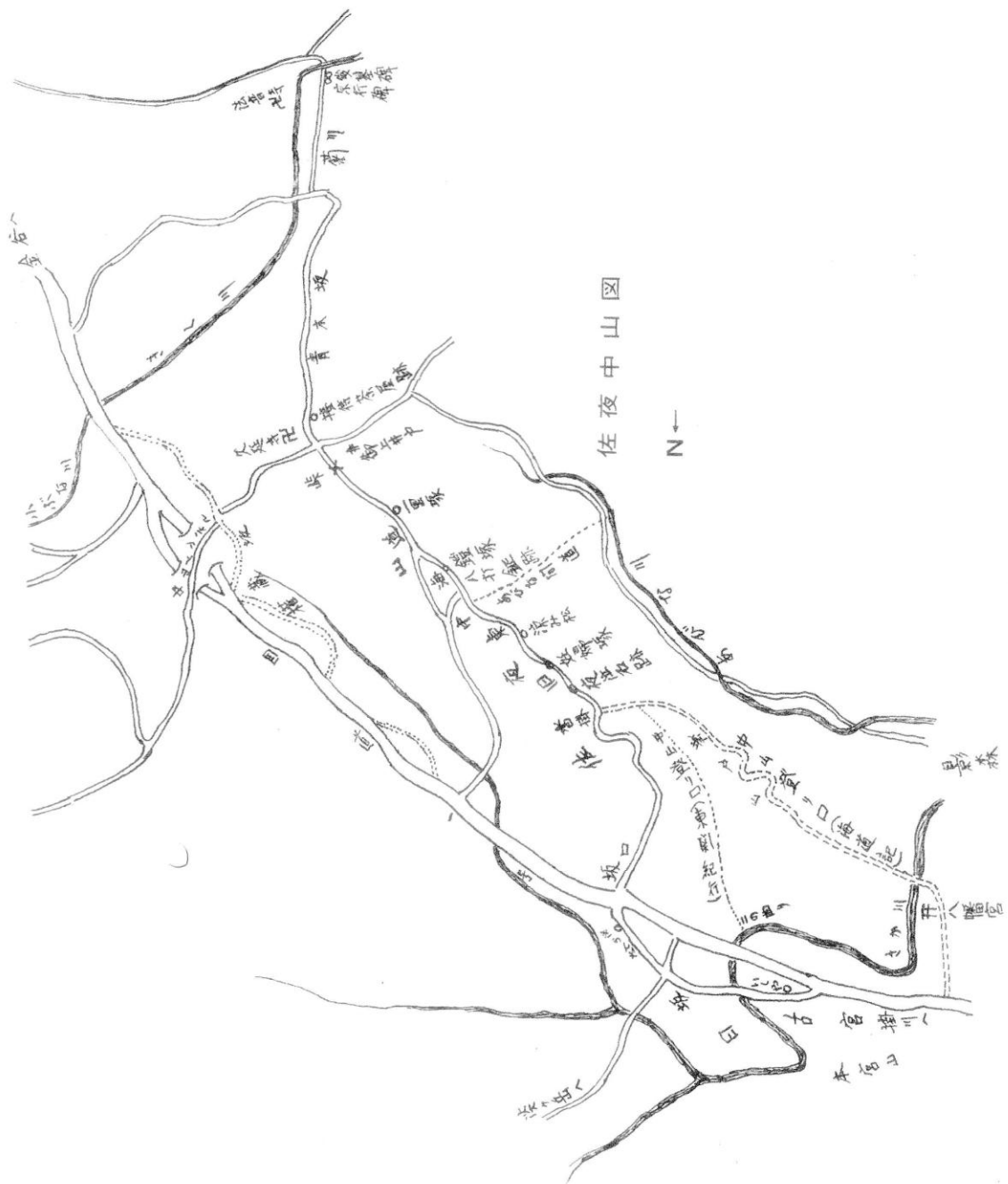
が元歌となり、そのイメージが中世から近世に至るまで、絵画や焼き物、漆器、造形物などに広く愛好されてきた。これらも西行に寄せる人々の敬慕に他ならない。 注⑮

注⑭ <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0066330>

Artmatome.com/『大原御幸・富士見西行図屏風』%E3%80%80 狩野尚信/
Kenpakunews.blog120.fc2.com/blog-entry-834.html?sp

西行法師への敬慕或いは憧憬が、日本の歴史に長く受け継がれ続けた。

このように古代と中世を橋渡しした功績や文化に大きく寄与した西行法師と、掛川、殊に小夜の中山が深いゆかりを戴いている事は、大いに誇りとしていいだろう。



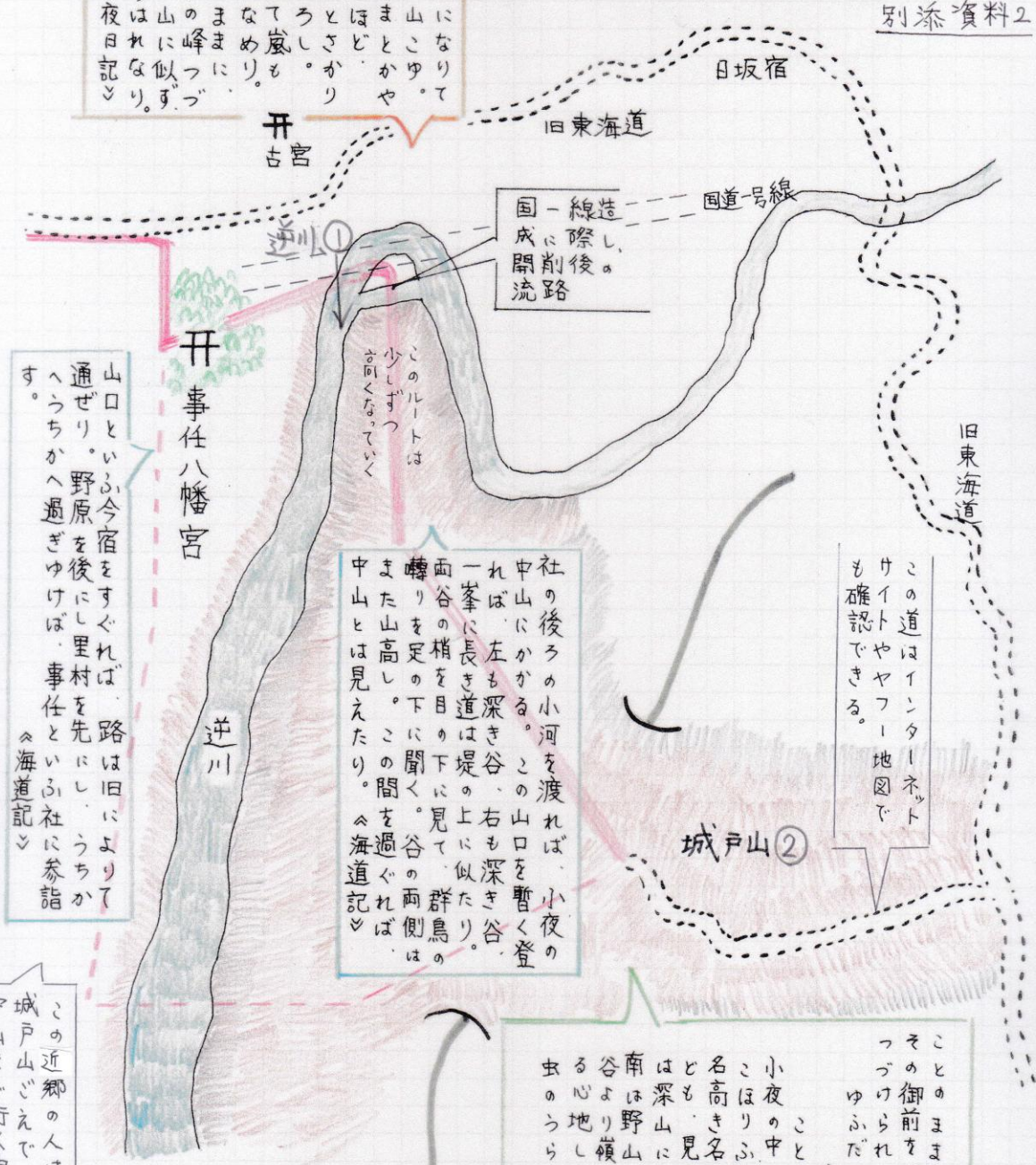
『駿遠 峠の古道』(内藤亀文)
より.

中世の古東海道

小夜の中山 径路図

別添資料2

廿四日屋になりて
さやの中山こや
ここのままとかや
いふ社のほとかり
もみぢいとさかり
におもしうし
山がけにて嵐も
およばぬめり
深く入るまに
をちこちの峰つづ
心ぎここの山に似
々十六夜日記シ



山口といふ今宿をすぐれば、路は旧によりて通ぜり。野原を後にし里村を先にし。うちかへうちかへ過ぎゆけば、事任といふ社に参詣す。
《海道記》

社の後ろの小河を渡れば、小夜の中山にかがかる。この山口を暫く登れば、左も深き谷、右も深き谷、一峯に長き道は堤の上に似たり。面谷の梢を降り下に見て、群鳥の囀りを足の下に聞く。谷の両側はまた山高し。この間を過ぐれば、中山とは見えたり。
《海道記》

この道はインターネットサイトやフリー地図でも確認できる。

この近郷の人は城戸山ぐえで中山まで行く由

鎌倉時代の旅人は、皆、菊川の宿に泊まっていた。海道の宿に泊まるとあり、次は菊川とある。この時代、日坂は宿場ではなかつたのだらう。江戸時代になり、日坂宿が成立してから、東山の今の宿は、日坂に吸収されたと考えられる。

この御前をすくといて、いささか思ひつづけられし。
ゆふだすきかいてそなたのむ
今思ふ
小夜の中山は、古今集の歌に「よこほりふせる」と詠まれたれば、名高き名所なりとは聞きおきたれども、見るに、いよいよ心細し。北は深山にて、松の露はげしく、南は野山にて、秋の花、露しげしく、谷より嶺にうつる道、雲に分け入る心地して、鹿のね、涙を催し、虫のうらみ、あはれ深し。
《東関紀行》

掛川バイパス

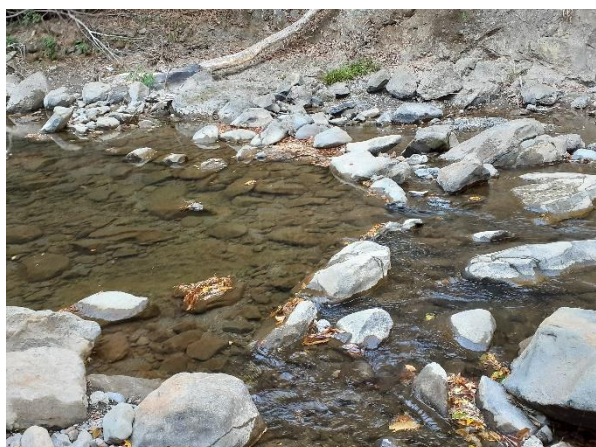
事任八幡宮前景と裏の小河（逆川）



事任八幡宮前景、後ろが城戸山（地図②）
近郷の人はこの山を越えて、小夜の中山
に出かけたという。



国道開通時に開削された川（地図①）
ここを渡る場合もあったらしい。



裏の小河



裏の小河（上流を見る）

補説（中世の宿）

難所の小夜の中山を越えた中世の旅人は、山口の牛頭^{ごうず}にあった今宿（街道変更後に、山鼻に移ったらしい）に泊まるか、菊川の宿に泊まった。論文に述べた3人の旅人は、全て菊川に泊まっている。旧東海道が整備されてからは、今宿は日坂宿に吸収されたと考えられる。

つまり、中世はじめ頃には日坂宿は成立していなかったと考えられ、山奥迂回の道筋より直進の城戸山を越える道が選ばれたらしい。先を急ぐ歩きの旅人は峠で日暮れにならぬよう、菊川の宿を目指したものであろう。